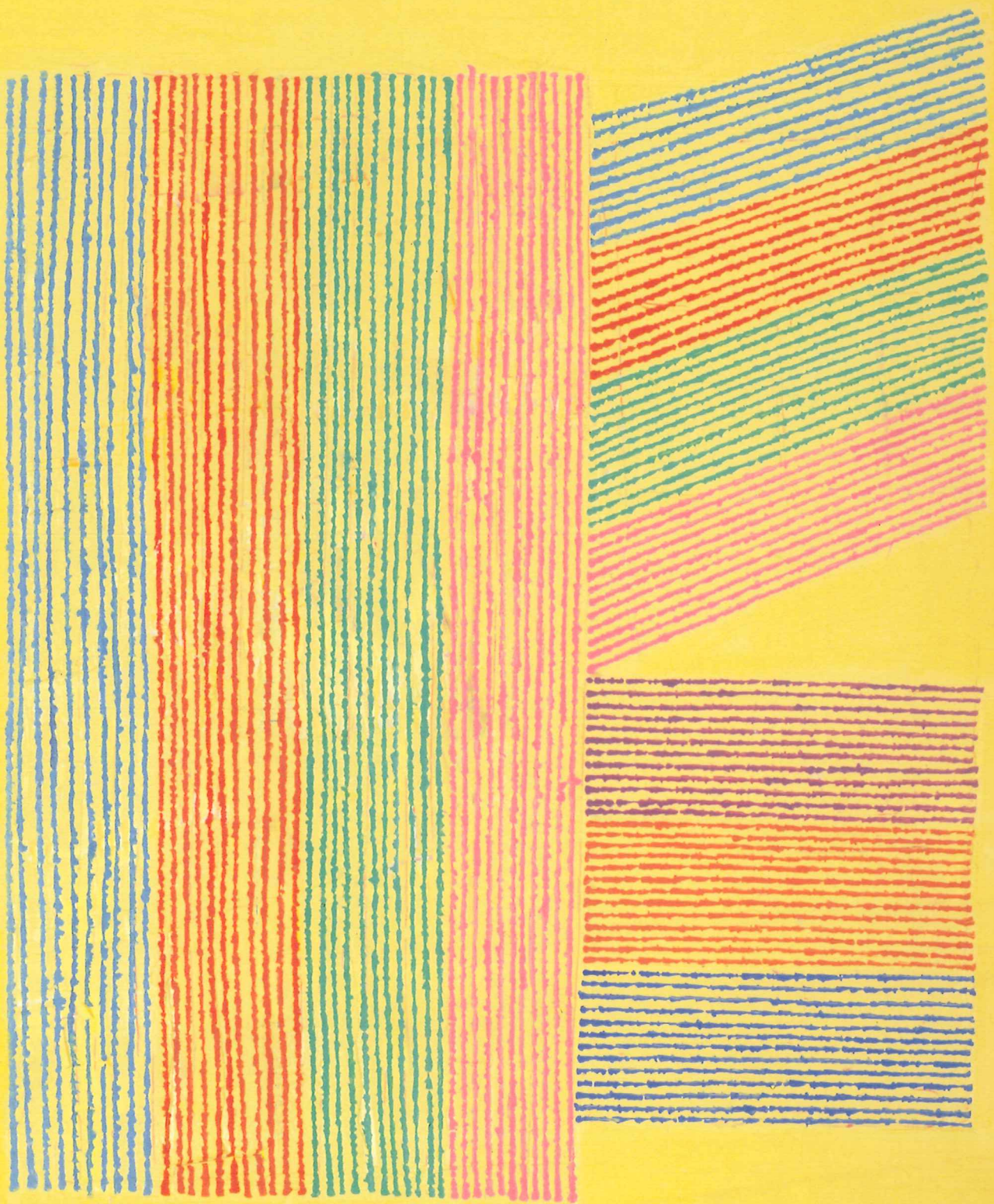


approach

Spring 2016



選ぶ能力

阿川佐和子

弟が幼い頃、私は傍らに腰を下ろし、よく絵本を読み聞かせた。その理由は、歳の離れた弟の養育係を自認していただけて、私自身、絵本を朗読するのが好きだったからである。絵本に登場するさまざまな動物や王様や魔法使いになりきって、それぞれに声色を変えて読むと、まるで物語の世界を散歩しているような気持ちになる。いつかこういう仕事をしたい。テレビの「まんが日本昔ばなし」の市原悦子さんが引退したら、是非とも私に後釜をお任せいただきたいと妄想を膨らませていたものだ。

それは半分、冗談として、真面目な理由はもう一つあった。弟に本を好きになってもらいたかったのである。恥ずかしながら、姉の私は小さい頃から本を読むのが苦手だった。小説家の父と読書が趣味の母の間に生まれながら、どうしたことか、本と仲良くなるタイミングを逸してしまった。二つ歳上の兄は反対に、ふと気づくといつも本と一緒にいた。「お兄ちゃん、ご飯だよ」「お兄ちゃん、出かけるよ」などといく声をかけても聞こえないほど本に没頭してしまふ。私もいつか、兄のようにまわりの音が聞こえなくなるくらい本に夢中になってみたい。そう願えば願うほど、本のそばに近づくことができなかった。

こういうことはきっと、物心つくつかぬ年頃から身につけさせるのが肝心であろう。弟を、私のような本嫌いにさせないためには、できるだけ早く本に馴染ませよう。養育係を任された私は、弟がハイハイを始めたあたりから行動に出た。つまり、自分の気に入りの絵本のみならず、これは面白そう、これは絵がお洒落と思われる絵本を次々に差し出して弟の様子を窺った。そして必要に応じて読んで聞かせたり、自分でページをめくらせたりしてみる。

すると、面白いことに、弟の反応は明解だった。興味の無い本には見向きもしないけれど、一度気に入ると、何度でも何十回でも繰り返し読みたがる。そしていつのまにか、ページをめくる前に次のページの文章をそらんじるほどになったのだ。

何を基準に選ぶのか。どこにピンとくるのか。大人にはわからない幼児の直感が働くらしい。いったい私も幼い頃、弟のようにきっぱりと本を選んでいただろうか。そしていつからその能力が弱ってしまったのか。今でも小さい子供が本に向かう姿を見かけると、その能力を取り戻す方法を教えてもらいたいものだと思う。

ちなみに姉の努力の甲斐あって、弟は本好きになりました。

目次

表紙 Aoi Huber

1 葵・フーバーの世界

2 特集:

葵・フーバー

——創作の世界

葵の創作への想い

文＝ジャンピエロ・ボソーニ

芸術家のもつ隠れた触覚

文＝ブルーノ・ムナリ

対談：出会いから作品が生まれる

葵・フーバー × 中村好文

写真＝アドリアーノ・ビオンド、轟 近夫、
トーマス・リビス、他

20 タケナカトピックス

Contents

Cover: Aoi Huber

1 The World of Aoi Huber

2 Special Report:

Aoi Huber:

Perception and Creation

Aoi's Planned Hope

Text by Giampiero Bosoni

The Hidden Sensor of Aoi

Text by Bruno Munari

The Importance of Collaboration

Conversation with Aoi Huber and

Yoshifumi Nakamura

Photographs by Adriano Biondo,

Chikao Todoroki, Thomas Libis and others

20 Takenaka Topics

葵・フーバーの世界

グラフィックデザイン、エッチング、イラストレーションなど、幅広い造形手法で国際的に活躍する葵・フーバーは、日本のグラフィックデザインの黎明期に活躍した河野鷹思の長女として、1936年、東京に生まれた。東京藝術大学、スウェーデン王立芸術大学で学んだ後、1961年、ミラノに移り住む。世界的なグラフィックデザイナーであるマックス・フーバーのスタジオに勤め、イラストレーションを担当。やがて、フーバーは人生のパートナーとなる。ミラノを拠点にブルーノ・ムナリら多くのデザイナーと出会い、玩具や絵本、テキスタイルデザインなど、創作の場を様々な領域に求めるようになる。1969年、南スイスに住いを移した後はミラノに通いながらマリオ・ボッタをはじめとする建築家とカーベットを創作する機会に恵まれる。マックス・フーバーは1992年に他界するが、葵はその後南スイスに留まり、活動の場を広げながら2014年には日本にもデザインスタジオを設立した。日常の中で発見された「想いの種」が芽吹き、育まれ、そして花開いて生まれた数々の作品が、子供のための絵本から建築空間までを豊かに彩る。

*右頁：葵・フーバーのイラストをモチーフにデザインされたシルクのスカーフ

The World of Aoi Huber

Aoi Huber is a renowned international artist and designer whose works include etching, illustration, and product and textile design. She was born in Tokyo in 1936, the eldest daughter of influential Japanese graphic designer Takashi Kono (1906-1999). Upon graduating from what is currently Tokyo University of the Arts, Huber studied in Stockholm, Sweden at the Royal Swedish Academy of Fine Arts. She moved to Milan in 1961 to work as an illustrator at the studio of Swiss graphic designer Max Huber (1919-1992), whom she later married; eventually, the couple settled in the southern Ticino region of Switzerland. Throughout her career, Huber has been inspired by various eminent designers, including Bruno Munari, and she continues to explore a diverse range of mediums and products, ranging from toy design and book illustration, to the designing of fabrics, carpets and Japanese *washi* paper. Still based in Ticino, Huber pursues various collaborations with designers and architects, including Mario Botta. Huber's creations are founded in the every-day, and may be likened to carefully planted "seeds" which grow and bloom into beautiful flowers; she is best known today for her distinctive, colorful style.

*Opposite: Silk scarf with design motif by Aoi Huber.

特集 | Special Report

葵・フーバー——創作の世界

Aoi Huber

——Perception and Creation

io, Aoi

文——ジャンピエロ・ボソーニ, ブルーノ・ムナーリ

対談——葵・フーバー × 中村好文

写真——アドリアーノ・ビオンド, 轟 近夫,

トーマス・リビス, 他

Text by Giampiero Bosoni and Bruno Munari

Conversation with Aoi Huber and Yoshifumi Nakamura

Photographs by Adriano Biondo, Chikao Todoroki,
Thomas Libis and others

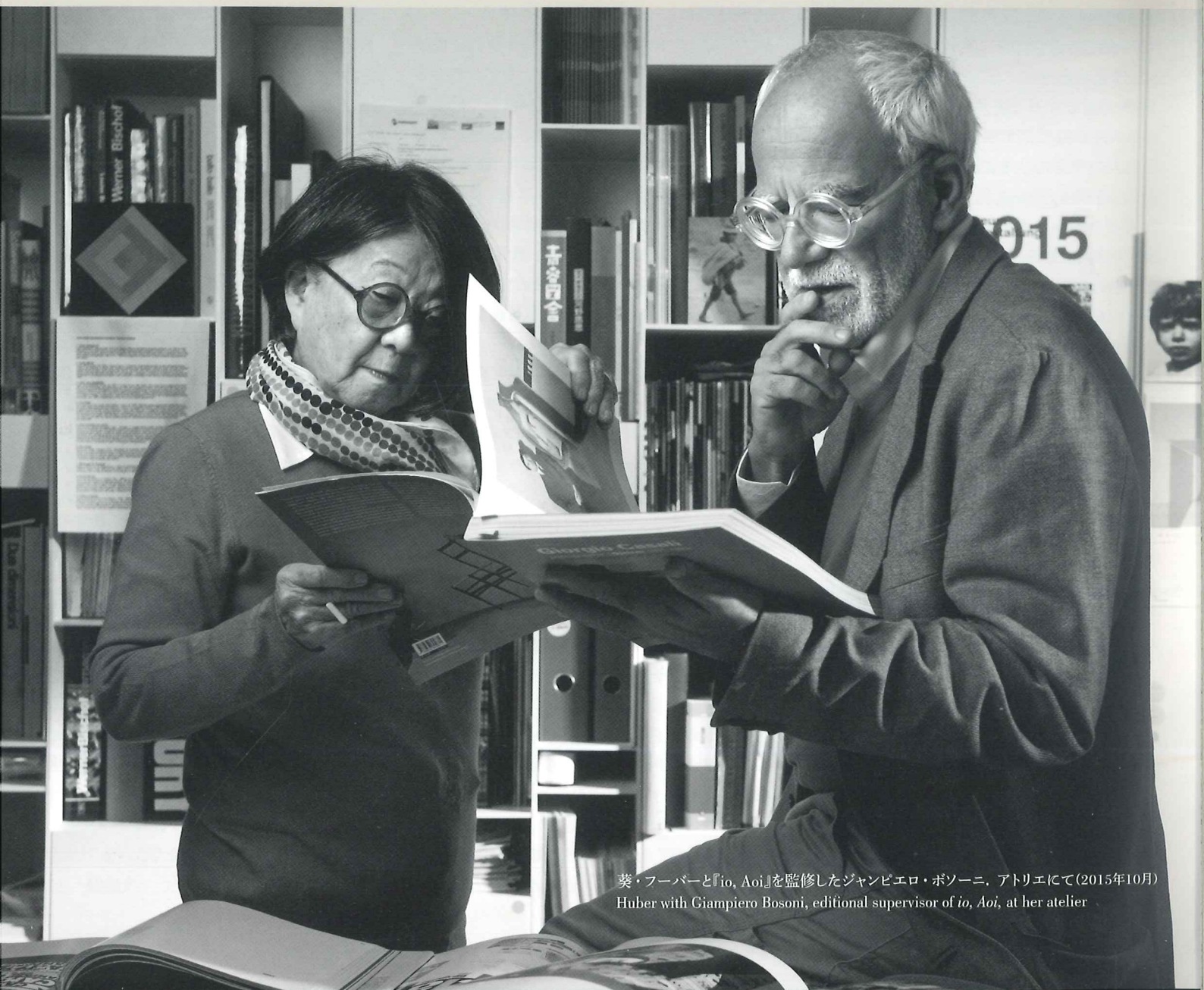
タイトルロゴは葵・フーバー作品集『io, Aoi』(1995)表紙より。

「io, Aoi」はイタリア語で「私は葵」を意味する。

タイトル・コピー: ブルーノ・ムナーリ, デザイン: アルベルト・ビアンダ

Works by Aoi Huber were collected in the book *io, Aoi* ("I am Aoi," 1995).
Title by Bruno Munari; cover design by Alberto Bianda

1960年、日本のグラフィックデザイン界を牽引していた
河野鷹思(1906-1999)は、東京藝術大学を卒業したばかりの
長女、葵にスウェーデンへの片道切符を渡した。
ストックホルムの王立芸術大学で学んだ葵は、やがて
ミラノの街に魅せられて移住を決意する。
そこで出会い、伴侶となったグラフィックデザイナーの
マックス・フーバー(1919-1992)亡き後も南スイスのアトリエで、
創作の領域を広げ続ける。
イタリアに程近い街、ノヴァツァーノのアトリエは、
葵・フーバーの陽気で豊かな色彩が満ちあふれている。



葵・フーバーと『io, Aoi』を監修したジャンピエロ・ボソーニ、アトリエにて(2015年10月)
Huber with Giampiero Bosoni, editorial supervisor of *io, Aoi*, at her atelier

葵の創作への想い

文＝ジャンピエロ・ボソーニ
(ミラノ工科大学インテリア建築・デザイン史教授)

私と葵が知り合ってから既に30年近くがたつが、これまでの数多くの思い出が二人の友情を年々より強いものにしていて私は思っている。その中で、私たちの友情をひときわ強く結びつけたのが、今から21年前、私が彼女の作品集『io, Aoi』(1995)に掲載する論評を書く機会を与えられたことだった。その作品集は、彼女の画家、イラストレーター、グラフィックデザイナーとしての多彩な創作活動を紹介するためのものであり、大変素晴らしい、貴重な経験となった。その作品集をつくるために、私たちは時間をかけて対話を続け、それまで彼女が芸術の世界を模索し成長するために辿ってきた歩みを事細かに振り返った。彼女は当時、人生の伴侶であった国際的デザイナー、マックス・フーパーを亡くして間もない頃で、再び一人で世界と繋がるきっかけを模索している人生の過渡期にあった。それまでマックスと二人の世界を生きてきた彼女は、今度は自分自身のストーリーを伝えるために、自分のそれまでの歩みを振り返ることにしたのだ。そしてマックスも生前、彼女に幾度となくそうすることを勧めていた。その作品集をつくるために、葵と私の共通の友人であるグラフィックデザイナーのアルベルト・ビアンダ(1955-)と過ごした日々のことを、私は今も覚えている。アルベルトは作品集のアートディレクターを務め、私たち二人は、彼女の人生のストーリーを如何にしてイメージや文字を使って作品集の中で展開するかを話し合った。

●マックス・フーパーとの出会い

彼女は第二次世界大戦終戦前の日本に生まれ、1960年にヨーロッパへと渡り、それから間もなく、スイス人グラフィックデザイナー、マックス・フーパーと出会う。彼はその頃、イタリア最大の産業都市で文化的にも際立っていたミラノで活躍していた。葵は彼と出会ったことにより、多くのアーティストやグラフィックデザイナー、建築家、音楽家、文学者たちが集う刺激的な世界に足を踏み入れることとなり、彼らと親交を深めていくのである。

21年前につくられた作品集の巻頭言は、イ

タリアデザイン界の巨匠、グラフィックデザイナーのブルーノ・ムナリー(1907-1998)が称賛と愛情を込めて彼女に捧げて書いたもので、「芸術家のもつ隠れた触覚」(P.7参照)と題されている。ムナリーは、夫妻の共通の友人であり、仕事仲間でもあった。ムナリー曰く、葵は日本の文化的価値観の裏側に芸術家特有の触覚を隠し持ち、誰も気づかない構造やテクスチャーの面白さを発見する機会に恵まれ、この「発見」する楽しさが葵を解き放ち、一連の多彩なデザインを生んでいるとしている。この、自らを解き放ち、楽しさに衝き動かされ、戯れるということが、葵が常に「生憎、私は今まで人生の中で計画たるものを立てたことがないのです」と恐縮しながら言うフレーズにつながるのかもしれない。彼女はそれがたとえ友人であろうと批評家であろうと、作品を見せる時は必ずそのフレーズを発するのだ。作品集を開いた読者の眼前に広がる、自身の豊かな創造性によって作り出された幅広いジャンルの作品について、それまでの歩みの途中で偶然的にできたアートなのだと、日本女性ならではの控え目な説明をする葵に私たちは魅了される。しかしながら、彼女のこの説明に私たちが完全に納得する訳ではない。なぜなら、彼女の作品は全て考え抜かれた1本の糸によってつながっており、どの作品も常に丁寧につくられ、明快であり、正確を期するものだからである。

彼女のこれまで制作してきた作品は全て、「彼女の人生の一大プロジェクト」の一部をなすものであり、それは彼女のこれまでの人生における数多くの楽しい出会い、例えば父であるグラフィックデザイナーの河野鷹思、夫のマックス・フーパー、友人であるブルーノ・ムナリー、建築家・プロダクトデザイナーのアキッレ・カステリオーニ(1918-2002)、建築家のマリオ・ボッタ(1943-)や様々なクライアントなどと巡り会う中でヒントを得て、できたものなのだ。彼女の「プロジェクト」を理解するためには、それらの出会いについて知ることが重要である。葵の言う「計画性のない」ストーリーを理解するためには、全ての作品に共通する分かりやすい1本の糸を見つけようとするのではなく、彼女のテキスタイルのデザインに見られるような「横糸(すなわち近くで見ると無秩序に点と点を結んでいるように見えるが、適切な距離から離れてみれば全体に調和して一貫性のあるイメージに見える)」を捉える必要があるのだ。

彼女の初期の頃のデザインの点・線・面・形の中には、彼女が日本で生まれ、教育を受けたということが見て取れる。父親である河野鷹思は日本のグラフィックデザイナーの重鎮であり、彼女の母親もコピーライターで、両親二人揃って現代アートの熱烈な擁護者だった。彼女はアートと音楽の両方を教える伝統的な芸術高校で学び、たまたま東京で開催されていた展覧会でフォービズム(野獣派)やマティスといった油彩画と「偶然」出会った。彼女はこの頃、初めての絵画作品、『自画像』(1952)を制作している。その後、東京藝術大学に進むが、その伝統的な教育方針に沿ったカリキュラムは、講義の半分が西洋美術(実際のモデルをもとに描画する伝統的な手法)、後の半分は東洋美術(低い書卓に向かい座位で筆と墨で描く)というものだった。当時の葵は抽象画、とくにグラフィックデザインはまるで禁じられたもののように思いこんでいたと回顧している。

そのような状況にあった葵は、大学を卒業した1960年に、父の助けを借り、スウェーデンの首都ストックホルムにある国立工芸職業学校(現スウェーデン王立芸術大学)でグラフィックデザインを学ぶべく、スウェーデンに渡る。そこで彼女はそれまで抑えていた興味をようやくアートとして表現できる機会を与えられる。しかし彼女にとって大きな転機となるのが、1961年にストックホルムで開催されたICSID(国際インダストリアルデザイン団体協議会)の会合に出席した父親とミラノに同行し、そこで紹介された天才的グラフィックデザイナーであり画家であったマックス・フーパーとの出会いである。そしてそれこそが彼女の「計画性のない」運命の糸を手繰り寄せる出来事となるのである。この愛情あふれる運命の糸が彼女をイタリア、スイスへと導き、その後の彼女の芸術活動や作品の源となる「光」や「空間」の原型を築ききっかけとなるのだ。

その当時彼女がイタリアの伝統的な建築、特に地方の風土建築に大変興味を持っていたことが、彼女の最初の作品集『io, Aoi』(1995)に収録されている作品のタイトル『ソンドリオの小宮殿』(1962)、『赤い家』(1963)、『縞模様の家』(1963)、『冬のシチリアの街』(1966)から伺える。その中に見て取れる空想的な形象は、彼女独自のグラフィックなシンボルへと次第に集約され、1964年に彼女が文と挿絵を描いた童話と詩の本『家たち』(ナバ社)となって大成する。



ノヴァツァーノのアトリエで仕事に取り組む。Huber at work in her home-based atelier.

●ミラノで生まれた独自のグラフィック表現

1962年にマックスと葵は結婚し、ミラノで暮らし始める。当時のミラノは様々なチャンスや出会いにあふれ、マックスと葵夫妻も、当時、注目されていた新進デザイナーや建築家たち、マッシモ・ヴィネッリ (1931-2014)、ハインツ・ワイブル (1950-1990)、ピノ・トバリ (1923-1977)、ピエールジャコモ・カステリオーニ (1911-1979)、エウジェニオ・ジェンティリ・テデスキ (1916-)、エルネスト・N・ロジャーズ (1909-1969)、フランコ・グリニャーニ (1908-1999)、セルジオ・アスティ (1926-)、ロベルト・メンギ (1920-2006)、ロベルト・サンボネ (1924-1995) などと親交を深め、意欲的なコラボレーションに取り組んだ。中でもブルーノ・ムナリーは葵にとって父の如く、拠り所となる存在だった。イタリアに行ってまもなくして、葵は彼に助言やアドバイスを仰ぐようになる。そして、1960年代半ばから後半にかけて、アーティスト、葵・フーバーの独自のグラフィック表現が形成されていったことを明確に示す二つの作品が発表される。一つは先に述べた1964年にナバ社から発刊された家をテーマとした本であり、もう一つは、1968年にエンメ出版から発刊された子供のための本『大きな魚』(P.15参照)である。後者は、マックス・フーバーがグラフィックデザインとタイポグラフィーを手がけた。この2冊を発表したことで葵は、「軽さ、線描的、フリーハンド」という自身の個性を確立した。その特徴は、見方によってはソウル・スタインバーグ (1914-1999)、ベン・シャーン (1898-1969) といったイラストレーター

のグラフィックデザイン的なラインを彷彿させるが、一方で鳥羽僧正の作とされる『鳥獣戯画』に見られる日本の伝統的描画テクニックを、斬新な感覚で蘇らせたようにも感じさせる。

1960年代後半の「ビート&ポップ」カルチャーにも、葵の想像力は前向きな影響を受けていく。彼女のアラベスク調のデザインは、その影響によってグラフィックの檻から解放され、細密で楽しげなデザインの万華鏡へと変化していく。美術史家のアンドレ・シャステル (1912-1990) が随筆の傑作『グロテスクの系譜』(1988) で述べているように、アラベスク調のデザインは広大な美術史の中の至る所に現れ、いつの時代のどこの国の作品であっても、抽象的・非現実的テーマを表す形象なのである。それは一般的に、空間を遠近法によって描き、表現や特徴を固定することに対するアンチテーゼなのである。

この当時のグラフィックやイラストの流れが、抽象的そして夢想的な表現を追求していた当時の葵と一致したのは偶然ではない。彼女の創作活動が装飾的なものやデザイン的なものへとさらに近づきながら展開していったことから、そのことは明白だ。その頃の彼女はセン

(1967-68)、またチューリッヒの宝飾店のためのイヤリングやカフスボタンなどの装飾品のデザイン (1968) を手がけている。

●広がっていく「想いの種」

彼女にとって初めてとなる絵画とデザインの個展は、1976年にチューリッヒで開催される。「想いの種を蒔く者は運命を収穫する」という言葉はまさに、葵の「計画性のない」人生を言い表していると言えよう。彼女はこれまで数多くの「想いの種」を蒔いてきたが、その大部分を占めるのがグラフィックアートや子供たちのためのイラストやデザインプロジェクトである。『ざくろの村』(1974) の制作にあたってはエンツォ・マリ (1932-) やレオ・レオニ (1910-1999) とアイディアを話し合っている。そのような中で刊行された『飛べ飛べ』(1973) は巨匠ブルーノ・ムナリーとの協働制作である。イラストは全てマジックを使って描かれ、まるでその本の著者であるムナリーと葵の4つの手で描かれたかのようである。1975年に彼女がネフ社と一緒につくった動物の顔を組み合わせる積み木のおもちゃは、今も優れた知育玩具として知られている。最近では、2013年にセルゲイ・プロコフィエフの音楽作品『ピーターと狼』に挿絵をつけた絵本 (P.15参照) があるが、それも素晴らしい。

そして彼女の「純粋なるアート」、いわゆる絵画、エッチング、テキスタイルやカーペットデザインなどの作品は、子供向け作品の創作活動の合い間に進められ、それらも素晴らしい発展を遂げている。中でも1980年代の半ば以降、葵のグラフィックの表現はカーペットとして、建築空間にも展開されるようになった。スイスに続き、日本及び各国で開催された他のアーティストたちとの合同展においても、彼女は批評家から高い評価を受けている。

私の彼女の作品に対する考察は21年前と何ら変わっていない。「葵・フーバーの蒔いた数多くの想いの種」は実際に行動となって現れ、その行動はやがて良い習慣となり、そうして芽生えた習慣は、全ての「偶然」や「実現しなかったアイディア」などの過程を経ながら大切に育まれ、やがて色彩の悦び、絵画への夢、子供のための玩具づくりなどの歩みの中で、彼女ならではの表現や個性となり、開花していった。そして彼女の創作の様々なアイディアは、決して消えることのない「期待」という形で、私たちに愉しみと幸せをもたらすのである。

ジャンピエロ・ボソーニ：1958年ミラノ生まれ。建築家、ミラノ工科大学インテリア建築・デザイン史教授。1996年、ミラノ・トリエンナーレのデザイン作品常設コレクションの製作。2007年、モントリオール美術館および世界各国で開催された「イタリアン・ファッション展」を監修する。2009年、MoMA（ニューヨーク近代美術館）に招かれ、同美術館収蔵のイタリアンデザインのコレクションについての本「イタリアンデザイン」（同美術館より出版）を著す。現在、フランコ・アルビーニ財団、イタリア・デザイン史協会（AIS/design）、ミラノ工科大学デザイン学科・調査研究センターの運営および科学委員会のメンバーを務める。

中村好文：1948年千葉県生まれ。建築家、武蔵野美術大学建築学科卒業。実道建築設計事務所勤務の後、都立品川職業訓練所木工科で家具製作を学ぶ。吉村順三設計事務所に勤めた後、1981年にレミングハウス設立。日本大学生産工学部建築工学科教授。1987年『三谷さんの家』で「第1回吉岡賞」受賞。1993年『一連の住宅作品』で「第18回吉田五十八賞「特別賞」」受賞。主な作品は、『Reil Hut』（栃木県、2001年）、『伊丹十三記念館』（愛媛県、2007年）、『明月谷の家』（神奈川県、2007年）など。主な著書に『住宅巡礼』『住宅読本』『意中の建築 上・下巻』（新潮社）、『中村好文 普通の住宅、普通の別荘』（TOTO出版）など。

ブルーノ・ムナリー：1907-1998年。ミラノ生まれ。イタリアの前衛美術活動「未来派」に共鳴し、造形作品の発表を始める。またその傍ら、1930年代より、グラフィックデザイナー、アートディレクターとして本の編集や装丁を手がけ、戦後は、ダネーゼ社などのためのプロダクトデザインも多く手がける。1954年、1955年、1977年に、イタリアのデザイン賞「コンパッソ・ドーロ」を受賞。1940年代より制作を始めた、子供の想像力を育てる実験的な絵本によって、絵本作家としても知られ、1974年、国際アンデルセン賞を受賞。

アドリアーノ・ピオンド：1961年スイス・バーゼル生まれ。1983年チューリッヒ造形芸術大学（現チューリッヒ芸術大学）を卒業後、フリーランスのカメラマンとして活躍。また、広告や出版物、展示などのアートディレクションも手がけ、大学客員講師として、ビジュアル・コミュニケーションなどについて講演を行う。1997年、ニューヨーク・アートディレクターズ賞を受賞。最近編集を手がけた出版物に『福島の彼方に』（小原一真著、ラース・ミューラー・パブリッシャーズ）など。

【写真及び資料提供】

アドリアーノ・ピオンド…P1・P5-7・P9(左・中)・P10(中・右)・P12(上・下)・P13(右上)・P14・P18-19
トーマス・ロビス…P3・P16-17 轟近夫…P8-13(左・右・下)・P15
中村好文…P9(右) 古城渡…P11
ジャン・バオロ・ミネリ…P12(中) ジョバンニ・ルイゾニ…P17(下)
インカードローイング…P20(上) 野口兼史…P20(中・下)
古川泰造…P21(上・下左)・P22(中)・P24
平井広行…P21(右下3点)
ナカサンド・パートナース…P22(左)
アイオイプロフォート…P22(右)
エスエス名古屋…P23(左) 勝田尚哉…P23(中)
Susan Fleck…P23(右)

【協力】

スタジオ・ブントビルゴラ…P1-19
安曇野ちひろ美術館…P11 Fiorio…P13(右上)
西海陶器…P13(右下) Laurameroni…P14
BOX & NEEDLE…P15(下)

エグゼクティブ・エディター：関谷哲也
タイトルデザイン：田中一光
デザイン：太田徹也

季刊 approach® 第213号
発行日——2016年3月10日
発行——株式会社竹中工務店 広報部
編集制作——株式会社コスモ・ビジュアル
印刷——大日本印刷株式会社

©2016 TAKENAKA CORPORATION

本社
大阪市中央区本町4-1-13 〈〒541-0053〉
Tel. 06(6252) 1201

北海道支店
札幌市中央区大通西4-1 〈〒060-0042〉
Tel. 011(261) 2261

東北支店
仙台市青葉区国分町3-4-33 〈〒980-0803〉
Tel. 022(262) 1711

東京本店
東京都江東区新砂1-1-1 〈〒136-0075〉
Tel. 03(6810) 5000

横浜支店
横浜市西区花咲町6-145 〈〒220-0022〉
Tel. 045(321) 1261

東関東支店
千葉市中央区中央港1-16-1 〈〒260-0024〉
Tel. 043(242) 0525

北関東支店
さいたま市大宮区桜木町1-9-6 〈〒330-0854〉
Tel. 048(647) 4471

名古屋支店
名古屋市中区錦2-2-13 〈〒460-8633〉
Tel. 052(211) 2111

大阪本店
大阪市中央区本町4-1-13 〈〒541-0053〉
Tel. 06(6252) 1201

京都支店
京都市中京区壬生賀陽御所町3-1 〈〒604-8811〉
Tel. 075(801) 2131

神戸支店
神戸市中央区磯上通7-1-8 〈〒651-0086〉
Tel. 078(265) 3300

四国支店
高松市西内町12-11 〈〒760-0022〉
Tel. 087(851) 1175

広島支店
広島市中区橋本町10-10 〈〒730-0015〉
Tel. 082(212) 0111

九州支店
福岡市中央区天神4-2-20 〈〒810-0001〉
Tel. 092(711) 1211

国際支店
東京都江東区新砂1-1-1 〈〒136-0075〉
Tel. 03(6810) 5000

開発事業本部
東京都江東区南砂2-5-14 〈〒136-0076〉
Tel. 03(6810) 5000

竹中技術研究所
千葉県印西市大塚1-5-1 〈〒270-1395〉
Tel. 0476(47) 1700

株式会社 竹中土木
東京都江東区新砂1-1-1 〈〒136-8570〉
Tel. 03(6810) 6200

「approach」は下記ウェブサイトで見ることができます。（日本語版・英語版）
www.takenaka.co.jp

The complete English version of approach magazine is available online on the Takenaka Corporation website:
www.takenaka.co.jp/takenaka_e

本誌に関するお問い合わせ、ご連絡は
広報部へお願いいたします。Tel. 03(6810) 5140

HEAD OFFICE
OSAKA
1-13, 4-chome, Hommachi, Chuo-ku, Osaka 541-0053, Japan
Tel: 06-6252-1201 Fax: 06-6271-0398

MAIN OFFICES
TOKYO
1-1, 1-chome, Shinsuna, Koto-ku, Tokyo 136-0075, Japan
Tel: 03-6810-5000 Fax: 03-6660-6012

OSAKA
1-13, 4-chome, Hommachi, Chuo-ku, Osaka 541-0053, Japan
Tel: 06-6252-1201 Fax: 06-6266-0012

BRANCH OFFICE LOCATIONS
Sapporo, Sendai, Yokohama, Chiba, Saitama, Nagoya, Kyoto, Kobe, Takamatsu, Hiroshima and Fukuoka

TAKENAKA RESEARCH & DEVELOPMENT INSTITUTE
5-1, 1-chome, Otsuka, Inzai-shi, Chiba 270-1395, Japan
Tel: 0476-47-1700 Fax: 0476-47-3050

OVERSEAS OFFICES AND SUBSIDIARIES
THAI TAKENAKA INTERNATIONAL LTD.
BANGKOK
Silom Complex, 26th Floor, 191 Silom Road, Bangrak Bangkok 10500, Thailand
Tel: 66-2-266-2800 Fax: 66-2-266-2808

THAI TAKENAKA INTERNATIONAL LTD. MYANMAR BRANCH
YANGON
No.45 (W) Tay Nu Yin Road, 7th Miles, Mayangone Township, Yangon, Myanmar
Tel: 95-1-662-188

PT. TAKENAKA INDONESIA
JAKARTA
Mid Plaza 1, 18th Floor, Jl. Jend. Sudirman Kav. 10-11, Jakarta 10220, Indonesia
Tel: 62-21-5735660 Fax: 62-21-5741684

TAKENAKA (MALAYSIA) SDN. BHD.
KUALA LUMPUR
Lot 2.01, Level 2, Menara Manulife, No.6, Jalan Gelenggang, Damansara Heights, 50490 Kuala Lumpur, Malaysia
Tel: 60-3-2095-1000 Fax: 60-3-2095-2000

TAKENAKA CORPORATION SINGAPORE OFFICE
SINGAPORE
167 Jalan Bukit Merah #16-10 Tower 5 Singapore 150167
Tel: 65-6899-8989 Fax: 65-6276-7333

TAKENAKA INDIA PRIVATE LTD.
GURGAON
805, 8th Floor, Vatika City Point, Mehrauli Gurgaon Road, Gurgaon, Haryana 122-002, India
Tel: 91-124-483-5900 Fax: 91-124-483-5999

TAKENAKA (CHINA) CONSTRUCTION CO., LTD.
SHANGHAI
Room 601-602, 6F Taiping Finance Tower, 488 Yin Cheng Zhong Lu, Pudong New Area, Shanghai 200120 China
Tel: 86-21-6859-1201 Fax: 86-21-6859-1203

TAKENAKA EUROPE GmbH
(European Headquarters)
DÜSSELDORF
Oststrasse 10, D-40211, Düsseldorf, Germany
Tel: 49-211-167940 Fax: 49-211-1679444

TAKENAKA CORPORATION (U.S.A.)
CHICAGO
555 Pierce Road, Suite #190, Itasca, IL 60143, U.S.A.
Tel: 1-630-250-3400 Fax: 1-630-250-3433

TAK DEVELOPMENT, INC.
NEW YORK
70 East, 55th Street, 4th Fl., New York, NY 10022, U.S.A.
Tel: 1-212-489-6001 Fax: 1-212-489-6002

TAK DEVELOPMENT, INC.
SAN FRANCISCO
222 Mason Street, 5th Floor, San Francisco, CA 94102, U.S.A.
Tel: 1-415-398-0232 Fax: 1-415-398-0322

TAK HAWAII, INC.
HONOLULU
Topa Financial Center-Fort Street Tower, 745 Fort Street, Suite 1608, Honolulu, HI 96813, U.S.A.
Tel: 1-808-523-5899 Fax: 1-808-523-9082

